

V 日本とアジア諸国の博物館交流事例の現状調査・比較検証

1 姉妹館提携等交流の現状

日本の博物館とアジア諸国の博物館との間で姉妹館提携や友好館提携等さまざまな形態で交流が行われている。平成 19 年度 調査報告書において姉妹提携館の事例が示されたが、本調査研究では、さらに交流している館同士による共同事業等についての調査を行った。具体的な事例を国別にして表に示す。

(1) 交流の形態

国立の博物館では、学术交流、学術研究交流、学術文化交流といった名称で協定を締結し、共同研究の実施、研究員の派遣または招聘、国際研究集会の開催等を主に行っている。

(独) 国立文化財機構が管轄する国立博物館では「我が国における博物館のナショナルセンターとして博物館活動全体の活性化に寄与」するものとして、海外博物館との交流事業を位置づけている。

公立の博物館では、設置者である自治体と姉妹都市提携にあるアジア諸国の都市の博物館との交流が多く見られる。例えば、鳥取県と中国の河北省は、ともに梨の生産地という縁から交流が深まり昭和 61 年 (1986) に友好県省の協定を締結し、以来、農業、学術の分野を中心に交流が行われ、平成 9 年 (1997) に鳥取県立博物館と河北省博物館が友好交流館協定を結んだ。平成 19 年 (2007) には協定 10 周年を記念し特別展を開催している。

また、神奈川県立歴史博物館と京畿道博物館 (韓国京畿道) および遼寧省博物館 (中国遼寧省) のように、博物館同士での協定の締結はないが、各国の自治体同士が友好提携を結んでいることにより、特別展の巡回開催など博物館交流が行われている事例もある。

一方、自治体同士の姉妹提携等はないが、同分野の博物館が研究等での交流により協定締結につながっている事例もある。茨城県自然博物館と内蒙古自治区博物館は平成 9 年 (1997) の友好姉妹館提携を締結しているが、この提携は自然博物館開館前に行われていたゴビ砂漠での茨城県調査隊と内蒙古自治区調査隊とによる恐竜化石等の共同調査がきっかけとなっている。平成 20 年 (2008) には、恐竜化石発掘地・内蒙古自治区博物館新館見学ツアーが開催された。

さらに、自治体と博物館が協定を結んだ特殊な事例もある。日本の長野県岡谷市と中国の蘇州絲綢博物館は平成 10 年 (1998) に学术交流協定を締結し、平成 20 年 (2008) に 10 周年記念特別展を市立岡谷蚕糸博物館で開催している。

また、日本、アジア諸国とも、国立・公立を問わず複数の博物館と提携している館がある。例えば、韓国の国立中央博物館は、日本の東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、宮崎県立西都原考古博物館と協定を締結しており、一方、日本の和歌山県の太地町立くじら

の博物館は、中国の北京海洋館、サンアジア海洋世界、海洋動物館と友好提携を結んでいる。

(2) 共同事業

共同事業の事例としては、共同研究、研究会等の開催、人材派遣、特別展や企画展の共同開催等があげられる。

共同研究では、日本の国立民族学博物館と韓国の国立民俗博物館による民博所蔵の「蔚山コレクションの共同研究」(平成 19 年度～/2007) や日本の国立歴史民俗博物館と韓国の国立中央博物館とによる「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」(平成 20 年度～/2008) 等の事例がある。

このような共同研究や各国の博物館の研究成果を相互に公表することを目的として研究発表会などが共同開催されている。国立歴史民俗博物館と韓国の国立釜山大学校博物館との共催で国際研究集会「日韓古墳時代の年代観」が開催された(平成 18 年度～/2006)。また、『博物館の文化遺産保護事業における役割』と『博物館国際協力の開拓』をテーマに「中日韓博物館国際学術シンポジウム」が北京で開催され、日本の江戸東京博物館、中国の北京首都博物館、韓国のソウル歴史博物館の館長等が出席している(平成 18 年度～/2006)。

人材派遣は、国立、公立、私立に関わらず多くの館で行われている。奈良国立博物館では、学術交流協定を締結している韓国の国立慶州博物館、中国の上海博物館、中国国家博物館、河南博物院の 4 館との間で研究員の招聘および派遣を 10 日～1 カ月の期間で行い文化財の調査研究等を行っている。また、日本の国立科学博物館が中心となって国内の科学館の実験の演示や指導を担当しているスタッフをオーストラリアの国立科学技術センター(クエスタコン)に派遣し、オーストラリアの科学館で実験ショーを行っているサイエンスパフォーマーと共同で実験プログラムの開発、実演などが行われた(平成 20 年度/2008)。さらに、先述の茨城県自然博物館の「恐竜化石発掘地・内蒙古自治区博物館新館見学ツアー」(平成 20 年度/2008)では、博物館関係者同士の交流ではなく、友の会のイベントとして友の会会員が訪れているという事例もある。

特別展や企画展の共同開催については、姉妹館提携等の締結時、または締結何周年記念等の節目での開催が多く見られる。例えば、日本の福井県立恐竜博物館は、中国の浙江自然博物館と姉妹館提携した平成 16 年(2004)に提携記念特別展「中国大陸の 6 億年～恐竜の里、浙江省の化石たち～」開催している。また、日本の石川県立歴史博物館では、平成 3 年(1991)の韓国の国立全州博物館との姉妹館提携後、提携 10 周年記念「韓日古代人の土と暮らし」展(平成 13 年度/2001)、15 周年記念「韓国文化への誘いー全羅北道の歴史と文化ー」展を開催している(平成 18 年度/2006)。共同研究の成果をもとにした特別展等の開催事例としては、国立科学博物館が、インドネシアのボゴール植物園との熱帯樹林に関する共同研究の成果をもとにした企画展「熱帯雨林・その魅力と新鮮な驚き～インドネシア・ボゴール植物園へのご招待～」を開催している(平成 18 年度/2006)。

その他の事業の事例としては、動植物も含めた資料の寄贈や交換展示等があげられる。

例えば、名古屋市東山動植物園では、昭和 59 年（1984）にオーストラリアのタロンガ動物園よりコアラの寄贈を受け、平成 13 年（2001）には逆に東山動物園からインドサイを寄贈し、平成 19 年（2007）には再びタロンガ動物園より雄ゴリラ寄贈を受ける等、動物交流が行われている。

以上のように、日本とアジア諸国の博物館とでさまざまな交流形態や共同事業が見られるが、現在も新たな交流が生まれており、ますます活発化している。平成 20 年（2008）には、宮崎県立西都原考古博物館が国立中央博物館（韓国）と学術文化交流協定を（1/11）、福井県立恐竜博物館と自貢恐竜博物館（中国）が姉妹館提携を（3/22）、福岡アジア美術館が釜山市立美術館（韓国）と相互協力協定を（11/12）、そして、山梨県立博物館と国立清州博物館（韓国）が学術交流協定を（12/18）締結している。さらに、長崎県美術館は、平成 20 年（2008）10 月に釜山美術館（韓国）の開館 10 周年記念講演とシンポジウムに招待されたのをきっかけに交流が深まり、平成 21 年（2009）夏に合同展示を開催する予定になっているなど、いままさに新たな交流が生まれようとしている事例もある。今後も韓国、中国を中心にアジア諸国との博物館同士の交流が増えていくものと思われる。

（中村 隆）

表 5-1-1 韓国の博物館との交流事例

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
東京国立博物館	国立中央博物館	学術交流協定	中央博物館より研究員 1 名を受け入れ
奈良国立博物館	国立慶州博物館	学術交流協定 1999/10/25	慶州博物館で「日本仏教美術」展を共同開催（2003 年度） 奈良国立博物館で「黄金の国、新羅」展を共同開催（2004 年度） 研究員 2 名を 1 カ月間招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館を視察し意見交換。慶州博物館に 1 名派遣し所蔵品を調査（2006 年度）
九州国立博物館	国立扶餘博物館	学術文化交流協定 2006/05/12	国立扶餘博物館の学芸研究士が九州国立博物館開館 3 周年記念国際シンポジウム「百済、倭そして大宰府」にて講演（2008 年度）
	国立公州博物館	学術文化交流協定 2006/05/13	国立公州博物館に研究員 1 名を派遣（2006 年度）
国立民族学博物館	国立民俗博物館	文化交流協定 2007/07/11	民博所蔵の蔚山コレクションの共同研究。 国立民俗博物館「海外の著名美術館・博物館への韓国語音声ガイドの設置支援プロジェクト」を受け入れ「みんぱく電子ガイド」韓国語版を稼動（2007 年度）
国立歴史民俗博物館	国立民俗博物館	学術研究交流協定 2003/05/01	国際研究集会「韓国の民俗学と日本の民俗学」開催（2004 年度～）
	釜山大学校博物館	学術研究交流協定 2004/07/14	国際研究集会「日韓古墳時代の年代観」開催（2006 年度）
	国立中央博物館	学術研究交流協定 2006/04	日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究（2008～2010 年度）
国立科学博物館	国立中央科学館	友好協定 2001	定期的な協力会議、専門家交流及び情報の共有化
千葉県立現代産業科学館	国立中央科学館	姉妹施設提携 2001/07/10	日韓国民交流年記念事業「JAPAN-KOREA 市民交流フェスティバル 2002」における展示会に参加（2002 年度）
江戸東京博物館	ソウル歴史博物館		北京で中日韓博物館国際学術シンポジウム開催。「博物館国際協力の開拓」について提言（2006 年度） ※北京首都博物館（中国）とも共同

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
神奈川県立歴史博物館	京畿道博物館	(神奈川県と韓国京畿道)	「遼寧省・京畿道・神奈川県の文物展一名宝にみる文化交流の軌跡」開催(2001年度) ※遼寧省博物館(中国)とも共同
山梨県立博物館	国立清州博物館	学術交流協定 2008/12/18	学芸員の相互派遣による内陸地域特有の文化について比較研究。展示技法や文化財保護技術、博物館教育についての共同調査研究
石川県立歴史博物館	国立全州博物館	姉妹館提携 1991/01/18	展示資料の貸借、職員の相互派遣提携10周年記念「韓日古代人の土と暮らし」展開催(2001年度) 提携15周年記念「韓国文化への誘いー全羅北道の歴史と文化ー」展開催(2006年度)
岐阜県現代陶芸美術館	利川世界陶磁センター (財団法人世界陶磁器エキスポ)	陶磁文化交流協定 2005/07	韓国、台湾(鶯歌陶磁器博物館)日本共同企画・アジア陶磁デルタプロジェクト・巡回展「じゃんけんぼんの考え方ー勝ち負けのない共存」実施(2006~2007年度)
佐賀県立名護屋城博物館	国立晋州博物館	学術交流協定 2003/02/18	学芸員の相互派遣による日韓交流史に関する共同調査研究(2008年度) 学術交流記念特別企画展「秀吉と文禄・慶長の役」(2007年度)
宮崎県立西都原考古博物館	国立中央博物館	学術文化交流協定 2008/01/11	日韓交流展「日韓の武具」、「日韓学術文化交流協定締結記念・講演会」(2008年度)
下関市立しものせき水族館(海響館)	釜山アクアリウム	姉妹館提携 2003/07/11	展示技術の情報交換 海響館が協力して釜山で「フグ展」開催(2003年度) 姉妹水族館3周年記念「韓国の淡水魚展」開催(2006年度)
福岡アジア美術館	釜山市立美術館	相互協力協定 2008/11/12	所蔵品展を開催するほか、学芸員の交流や共同調査 釜山で福岡アジア美術館の所蔵品展開催予定(2009年度) 福岡で釜山市立美術館の所蔵品展開催予定(2010年度)
長崎ペンギン水族館	釜山アクアリウム	姉妹館提携 2004/10/18	姉妹締結一周年を記念し、釜山アクアリウムへオオウナギを贈呈(2005年度)

表 5-1-2 中国の博物館との交流事例

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
東京国立博物館	上海博物館	学術交流協定 2007	
奈良国立博物館	上海博物館	学術交流協定	研究員 3 名を招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館を視察し意見交換。上海博物館に 3 名派遣し館及び中国国内の仏教遺跡を調査研究 (2006 年度)
	中国国家博物館	学術交流協定	中国国家博物館主任研究館員が奈良国立博物館での国際研究集会にて研究発表 (2007 年度)
	河南博物院	学術交流協定	研究員 2 名を招聘。河南博物院に研究員 2 名派遣 (2006 年度)
九州国立博物館	南京博物院	学術文化交流協定 2007/03/14	国際シンポジウム：日・中・韓学術文化交流協定締結記念「百済と古代東アジアの国際交流」開催 (2007 年度)
秋田県立博物館	甘肅省博物館	友好提携 (秋田県と中国甘肅省)	相互に毎年 2 名程度の交流員を派遣し、研修や情報交換等を実施
ふくしま海洋科学館	香港オーシャンパーク	友好園提携	企画展「大金魚展＝金魚伝来 500 年記念＝」開催。香港オーシャンパークの金魚専門の水族館「金魚大観園」から提供された中国金魚を展示 (2002 年度) 展示調査、共同事業打ち合わせで職員 3 名、クラゲ飼育に関する研修指導で職員 2 名派遣 (2007 年度)
茨城県自然史博物館	内蒙古自治区博物館	友好姉妹館提携 1997/08/21	恐竜化石発掘地・内蒙古自治区博物館新館見学ツアー開催。友の会初の海外ツアーとして、恐竜化石発掘地と、内蒙古自治区博物館を訪問 (2008 年度)
江戸東京博物館	北京首都博物館		北京で中日韓博物館国際学術シンポジウム開催。「博物館国際協力の開拓」について提言 (2006 年度) ※ソウル歴史博物館 (韓国) とも共同
神奈川県立歴史博物館	遼寧省博物館	友好提携 (神奈川県と中国遼寧省)	「遼寧省・京畿道・神奈川県の文物展－名宝にみる文化交流の軌跡－」開催 (2001 年度) ※京畿道博物館 (韓国) とも共同
いしかわ動物園	南京市紅山森林動物園	友好親善関係 (石川県と中国江蘇省)	動物交流：ミミギジを南京市紅山森林動物園より寄贈 (2001 年度) 「いしかわ動物園・南京市紅山森林動物園動物絵画展」開催 (2004 年度)

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
福井県立恐竜博物館	浙江自然博物館	姉妹館提携 2004/03/12	提携記念特別展「中国大陸の6億年～恐竜の里、浙江省の化石たち～」開催（2004年度）
	自貢恐竜博物館	姉妹館提携 2008/03/22	恐竜研究や収蔵する恐竜標本、研究員などの交流
京都文化博物館	陝西歴史博物館	友好提携 1994	友好交流記念「始皇帝と彩色兵馬俑展－司馬遷『史記』の世界－」開催（2006年度）
鳥取県立博物館	河北省博物館	友好交流館協定 1997	友好交流館協定10周年を記念し、万里の長城写真展「河北省の長城と歴史」開催（2007年度）
高知県立美術館	安徽省博物館	友好提携（高知県と安徽省）	高知県・安徽省友好提携5周年記念「安徽省博物館名品展－中国有悠久の至宝－」開催（1999年度）
新潟市歴史博物館	西安博物院	友好提携 2007/05/17	学術研究・調査の交流、両館の相互広報
日本土人形資料館	江蘇省無錫市泥人形博物館	芸術文化友好交流館提携 2006/09/28	無錫市から贈られた泥人形を展示、泥人形博物館にも中野土人形3体を展示
市立岡谷蚕糸博物館	蘇州絲綢博物館	学術交流協定および研究協力推進に関する協定（岡谷市と中国蘇州絲綢博物館） 1998	学術交流協定締結10周年記念特別展「中国古代復元絹織物展」開催（2008年度）
太地町立くじらの博物館	北京海洋館	友好提携 2005/09～10	「鯨類飼育等に関する学術交流事業」：中国国内における小型鯨類を飼育している海洋館との学術ネットワーク構築。太地町訪中団が中国の関係海洋館及び中国科学院水生生物研究所を訪問（2007年度）
	サンアジア海洋世界		
	海洋動物館		
福岡市博物館	陝西歴史博物館	友好館提携 1991	友好館提携一周年記念「唐代壁画展」開催（1992年度） 人事交流事業（学芸員の派遣・受入等）
国東市歴史体験学習館	浙江省博物館	姉妹館提携	「国東の遣唐使」派遣事業（国東市の事業）（2005年度） 浙江省博物館代表団が来訪（2007年度）
鳥羽水族館	上海自然博物館	姉妹博物館友好協定 1998/12/8	締結前に国上海自然博物館から恐竜化石標本を借り「鳥羽恐竜展'97」を開催（1997年度）
松江北堀美術館 芸術文化ホール	浙江省博物館	友好提携 2007/06	情報交換、人的交流
中国歴代博物館	北京故宮博物院		北京故宮博物院提供「宮廷文物展」を2年周期で開催 中国清代の茶道具展開催（2008年度）

表 5-1-3 その他の国の博物館との交流事例

a.台湾

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
国立民族学博物館	順益台湾原住民博物館	学术交流協定 2006/07/01	台湾原住民族の現代的動態に関する調査と学术交流

b.シンガポール

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
千葉県南房パラダイス	シンガポール国立植物園	姉妹園提携 1985/05	「シンガポールらん館」設置（1988年度） 提携15周年記念事業実施（2000年度）
宮崎県立青島亜熱帯植物園	シンガポール国立植物園	姉妹園提携 1965/10	シンガポール植物園より 32 品種のブーゲンビリアの寄贈（1971年度） シンガポール植物園園長から宮崎県知事に「ラン」の贈呈（2007年度）

c.インドネシア

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
国立科学博物館	ボゴール植物園	交流協定 2006	共同研究「熱帯樹木のフェノロジー調査」の成果を公開した企画展「熱帯雨林-その魅力と新鮮な驚き～インドネシア・ボゴール植物園へのご招待～」開催（2006年度）
群馬サファリパーク	タマン・サファリ・インドネシア	姉妹園提携 2000/08/06	タマン・サファリ・インドネシア紹介コーナー設置（写真・パネルによる紹介、オリジナルグッズの販売） 毎年「インドネシアフェスティバル」を開催、ジャワヒョウ、オランウータン等の動物交流

d.オーストラリア

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
国立科学博物館	国立科学技術センター	友好協定 2000/03	クエスタコン設立 20 周年記念プログラムの 1 つ「サイエンスパフォーマー交流プログラム」に参加協力（2008 年度）
日本科学未来館	国立科学技術センター	協力協定 2002/02	2006 年日豪交流年記念両館共同制作の展示会「革新：オーストラリアと日本の協力展」開催（2006 年度）

名古屋市東山動植物園	タロンガ動物園 ウエスタンプレーン動物園	姉妹動物園提携 1996/09	職員や技術交流、希少動物の種の保存に相互協力 タロンガ動物園よりコアラ寄贈（1984年度） 東山動物園からインドサイ寄贈（2001年度） タロンガ動物園より雄ゴリラ寄贈（2007年度）
横浜八景島シーパラダイス	シーワールド	姉妹パーク提携 1996/04	シーワールドの水上スキーチームによる「水上スキースペクタクル」開催（1999年度） オーストラリアの動物と触れ合う「オーストラリアンフレンドリーファーム」開催（2000年度）

e. ニュージーランド

博物館名	提携先	形体・締結年	共同事業例
白瀬南極探検隊記念館	カンタベリー博物館	姉妹館提携 1992/07	名古屋海洋博物館で開催された企画展「南極の悲劇と奇跡」においてカンタベリー博物館の所蔵品の展示を支援（2007年度） にかほ市から白瀬轟中尉のブロンズ像をカンタベリー博物館に永久貸与（2007年度）

(中村 隆)

2 中国の博物館との交流連携事例

古来、中国より多くの文物、文化を受容して来た我が国には、博物館に関して、中国との間には歴史的な結びつきがある。清朝末期、明治36年（1903）に実業家、張謇なる人物が日本に赴き、明治政府による新国家建設の状況を視察した際に、博物館と展覧会を見学して啓発され、帰国後の明治38年（1905）、郷里に中国初の近代博物館である「南通博物苑」を開設したこと（注1）である。また、中国語にもなっている、博物館という言葉は、日本から伝わったとする説（注2）もあるとのことである。文明開化、和魂洋才のもとに欧米より技術、文化を導入した日本にあって、「博物館」という言葉は、それ以前、既に幕末の蕃書調所での翻訳文をはじめとして、万延元年（1860）の遣米使節団にはじまる、幕末の海外派遣使節団員による日記や刊本に現れていた。そして、福沢諭吉の『西洋事情』初編（巻之一 慶応二年）以降、博物館という用語が一般に定着するようになった（注3）という。

かつて中国より漢字を取り入れた日本から逆に、博物館という言葉が中国に渡ったのであれば、相互に文化を受容し、あるいは影響を与えあってきた同じアジアに属する国ならではの出来事であると言える。

さて、現代においても、日本の博物館と中国の博物館との交流は、行政、民間レベルを問わず、様々な組織、団体において、その活動目的に応じ多岐に亘った形態で行われている。それは活動規模やテーマ、内容から国レベル、学会レベル、個人レベルの活動としても捉えることができる。博物館における調査、収集、研究、保存、展示等あらゆる分野において行われているが、それらの交流は、恒常的交流、時限的交流であるに拘わらず、実物資料とそれに関係する情報の交流として、また、人を介しての博物館活動に必要な技術や情報についての交流として大きく捉えることができる。つまり「資料の交流」と「人材の交流」である。

なんらかの契機により行われる時限的な交流は別として、“国際文化交流”を博物館の活動目的に定め、その活動を継続的に推進すること自体、国を代表する博物館や、特定の設立目的やテーマを持つ博物館以外には少ないと言える。それら以外の例は、前章で述べられているように各団体、組織によって推進されている活動に博物館側が参加していると言う状況であり、博物館が自らの意思によって積極的に進めているものではない。そのため、ここでは国を代表する博物館である、独立行政法人国立博物館における交流事例をとりあげることで、日中両国博物館の交流状況の一つの事例を確認するものとする。

独立行政法人国立文化財機構が所管する、我が国の国立博物館4館（東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）の設置目的（注4）には、「我が国の「顔」として国際文化交流を推進する」こと、「ナショナルセンターとして国内外の博物館の充実に寄与する」ことが掲げられている。各館は海外の博物館とそれぞれ学術交流協

定を締結し、随時継続、更新を行っており、締結館は増加の傾向にある。これら国立博物館4館では「我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化」をめざして、具体的に様々な活動が行われている。すなわち、海外における展覧会開催、海外交流展、海外への列品貸与、調査のための海外渡航、外国人の招聘と受入、海外研究者等との共同研究、国際的な講演会・シンポジウムの開催、などである。これらの活動には、企画展開催の準備、借用貸与資料に関する調査など、日本側から中国側博物館への渡航も含まれ、実務レベルでの極めて多様な業務内容が含まれている。そのため「資料交流」や「人材交流」の視点から、博物館相互の国際文化交流として、特にその具体像が顕著に見られる、展覧会開催、外国人招聘について取り上げた。

展覧会開催については、開催に至る経緯やその内容等について、「独立行政法人国立博物館年報」の事業実績報告（注5）より抽出し、活動概要としてまとめた。展覧会の開催には「日中友好条約締結30周年」「日中国交回復35周年」「日本中国文化交流協会創立50周年記念」などを契機とし、日本、中国双方の博物館に於いて周年事業展として開催されるものがある。その他、遣唐使井真成の墓誌の発見を契機として開催されたような新発見・速報展、「喪乱帖」のように日中文化交流の歴史的背景を持つ、収蔵資料を契機とする、里帰り展と言えるものがある。

海外交流の視点からは、展覧会は相手国の名品を一堂に会しての名品展を開催する、ということが基本となっているが、東京国立博物館では「中日書法珍品展」（海外交流展）、「書の至宝―日本と中国」（共催展）、「西川寧書法芸術展」（海外交流展）、東京国立博物館蔵「西川寧書法芸術展」のように、書をテーマとした交流を重ねて来ており、このような展覧会は、資料に止まらず、広く現在の芸術文化へもひろがる、漢字文化を共有する日本と中国ならではの特徴的な事例であろう。また九州国立博物館の特別展「中国 美の十字路」においては、シルクロード、中央アジアの諸民族と中国大陸との往還の中で成熟して行った中国美術を紹介し、従来の漢や唐といった王朝の名宝展でない、新たなテーマでの試みがなされている。

外国人招聘については同書の「外国人招へい」より中国からの招聘者のみを抽出している。招聘者はどのような職にあり、どのような用務で招聘されているのか、と言う点から、また招聘者の方々をご紹介する意味も含め、個人名を報告書の通り掲載している。

中国からの招聘者は学術文化交流協定を結んだ締結館との学術交流を基本としている。研究にともなう情報交換の他、双方の収蔵資料調査、研究テーマに基づく国内の遺跡調査、博物館視察が中心となっている。このほか、国際シンポジウムにおける講演者としての招聘や展覧会開催にあたっての準備等が見られる。招聘、受入を行った館にこちらからも出向く、と言った交流が多く見られる。また、招聘に際して、文化庁の「アジア諸国博物館・美術館研究協力事業」、住友財団の「住友財団海外文化財維持・修復事業」の活用が見られ、外部資金の導入例が見られる。

以下、平成18年度（2006）から平成15年度（2003）までさかのぼり、国立博物館4館と

中国の博物館との交流事例の概要について、展覧会開催を「資料1. 展覧会」、外国人招聘を「資料2. 海外研究者の招聘等」としてまとめた。国立博物館4館の各事業の詳細内容については巻末資料、国立博物館における中国・韓国国際交流事例をご覧いただきたい。巻末資料では、中国の他、韓国についても抽出している。

(吉田 雅之)

(注1) 『中国博物館総覧(下巻)』 「中国博物館総覧」刊行委員会

(注2) (*注1前掲『総覧(下巻)』)

(注3) 『博物館概論』編著者 伊藤寿朗、森田恒之 発行 株式会社 学苑社 1978

(注4) 『独立行政法人国立博物館年報』編集・発行 独立行政法人国立博物館

*平成15年度から平成18年度の各年度 平成19年度未発行

(注5) 前掲『独立行政法人国立博物館年報』

■資料1. 展覧会

○東京国立博物館

「悠久の美 中国国家博物館名品展」(共催展)

日中国交回復35周年、日本中国文化交流協会創立50周年記念として開催。5000年にわたる悠久の時間の中で培われた、広大な中国各地の様々な文化財を紹介。中国国家博物館の収蔵品の中から、特に美術的価値の高い名品61件を厳選、公開。よりすぐりの名品を、じっくりと鑑賞することができる機会を提供し、また、中国側との協力態勢により、図録や会場の解説パネルについても入念な準備を行い、観覧者へ適切な情報を提供。

1) 開催期間 平成19年1月2日～2月25日

2) 会場 平成館 特別展示室第3室～4室

3) 主催 東京国立博物館・日本中国文化交流協会・朝日新聞社・中国国家博物館

4) 陳列品総件数 61件

「中日書法珍品展」(海外交流展)

日本と中国の歴代の書の名品を一堂に会し、両国の書の名品を通じて、書芸術の素晴らしさを広く紹介。「喪乱帖」が1300年ぶりに里帰りを果たすと同時に、日本の書が本格的に中国で紹介された画期的な展覧会。中国で大きな反響を呼び、多くの来館者に日中両国

の書のすばらしさ素晴らしさを紹介。また、展覧会に関連して国際シンポジウムを開催。外部機関の研究者と密接な連携・協力を行うことにより、質的にも高い水準のものを実現。

- 1) 開催期間 平成 18 年 3 月 13 日～4 月 23 日 (42 日間)
- 2) 会場 上海博物館 (中国)
- 3) 主催 上海博物館、東京国立博物館、朝日新聞社
- 4) 陳列品総件数 103 件 (うち国宝 18 件、重要文化財 10 件)

「書の至宝—日本と中国」(共催展)

日本と中国の歴代の書の名品を一堂に会し、書の本場・中国の書の特色と日本の書との関係などを対比的に捉え、それらの芸術的な価値をじっくり鑑賞することができる機会として開催。中国と日本における書文化の歴史を振り返り、中国の影響を受けながら独自の世界を築いてきた日本の書の展開を、両国の書の名品 189 件を通して概観し、さまざまな文化や思想を背景として形成された書の世界に迫った。併催事業として「現在書道二十人展 50 回記念 日本書壇の歩み—昭和から平成へ」を開催。日本と中国の書の名品が一堂に会する展示会で、中日の書法の影響等を比較することができる展示構成とすることで、ただ名品を鑑賞するだけでなく、日中の文化の類似点、相違点を明示。

- 1) 開会期間 平成 18 年 1 月 11 日～2 月 19 日
- 2) 会場 平成館 特別展示室第 1 室～4 室
- 3) 主催 東京国立博物館・朝日新聞社・テレビ朝日・上海博物館
- 4) 陳列品総件数 189 件 (中国 106 件、日本 83 件、うち国宝 33 件、重要文化財 20 件)

「西川寧書法芸術展」(海外交流展)

昭和の日本書壇を代表する書家で文化勲章授章者である西川寧の代表作を厳選し、ゆかりの深い中国の地で回顧展を開催し、日中文化交流の一助とした。西川寧の主要作品を、篆書、草書、楷書など、技法別に分けて展示し、その足跡や作風を振り返りながら、書の本場である中国の人々に日本現代書道の真髄を紹介。中国国家博物館との間で実施したはじめての共催展であり、書の本場・中国においての、中国とゆかりの深い日本人の書法展の開催は、日本と中国の文化交流にとって大きな意味があった。

- 1) 開会期間 平成 17 年 3 月 26 日～5 月 8 日 (44 日間)
- 2) 会場 中国国家博物館 (中国)
- 3) 主催 東京国立博物館、中国国家博物館、謙慎書道会
- 4) 陳列品総件数 77 件

東京国立博物館蔵「西川寧書法芸術展」

昭和の書壇を代表する西川寧は、書家として初めて文化勲章を受章。青年期中国へ留学し、その成果をもとに自らの書法を確立。展覧会は西川寧と縁の深い中国の地で回顧展を

開催し、日中文化交流の一助にしようとするもの。平成 14 年（2002）、西川寧の生誕 100 年を記念し、東京国立博物館で開催された展覧会の出品作品をもとにして構成展示。西川寧の代表作 77 件を展示し、その足跡をたどりながら、西川寧が目指し、表現した書の世界を中国において紹介。中国の書が日本にどのような影響を与えたか、中国の人々に理解してもらおう一助となった。

- 1) 開催期間 平成 15 年 3 月 28 日～5 月 5 日
- 2) 会場 中華人民共和国上海博物館
- 3) 主催 東京国立博物館・上海博物館・謙慎書道会
- 4) 陳列品総件数 77 件

○奈良国立博物館

「遣唐使と唐の美術」（共催展）

西安市内で新たに発見された遣唐使の墓誌を中心に、同時代の中国の一級の美術工芸品を展覧し、遣唐使が果たした文化的な役割と唐文化の特質を紹介。平成 16 年（2004）に中国で発見され話題となった、彼の地で没した日本人、井真成の墓誌と唐代工芸の粋を展示。井真成の墓誌は、中国で発見された初めての遣唐使の墓誌で、新聞各紙で取り上げられ国民的関心となり、研究者間でも議論が盛んで、公開は時宜を得たもの。

中国・唐時代の金銀器や鏡、三彩などは正倉院宝物の原点でもあり、同展に続く正倉院展との連続性において、展示・解説業務に奥行きを持たせた。更に特別陳列「模造にみる正倉院宝物」を同時に開催し、彼我の工芸技術の連関に触れることもでき、総体として展示を充実。また、金銀器の湿度設定や焼き物への耐震対策など、作品の保全にかかわる意識が更に高められた。

音楽会やワークショップを館内各所で開催（5 日間延べ 43 回）。小・中学生の入場料金を無料にし、文化財に親しむ機会の増加に配慮。

- 1) 開会期間 平成 17 年 9 月 20 日～10 月 10 日
- 2) 会場 西新館
- 3) 主催 奈良国立博物館、社団法人日中友好協会、朝日新聞社、中華文物交流協会
- 4) 陳列品総件数 82 件（うち重要文化財 11 件、重要美術品 2 件）

「日本名宝展」（特別展）

平成 15 年（2003）、日中友好条約締結 30 周年を迎えた。文化庁と協力し、中国国民の日本文化理解と友好関係の育成を図るため、中国北京市において初の国家間規模の日本美術展を開催。縄文土器などの考古遺品をはじめ、仏教美術、正倉院宝物（模造）、貴族と武家の暮らし、近世美術という構成で日本美術の粋を展示。日本文物を総合的に紹介し、日本文化の理解に大きく貢献。

- 1) 開会期間 平成 16 年 5 月 25 日～6 月 30 日
 - 2) 会場 中国国家博物館
 - 3) 主催 中国国家博物館、奈良国立博物館、文化庁、国際交流基金
協力 全日本空輸
 - 4) 陳列品総件数 99 件（うち国宝 6 件、重要文化財 24 件、重要美術品 2 件）
- * 講演会等
中国国家博物館職員によるギャラリートーク 随時
現地ボランティアによる展示解説 等

○九州国立博物館

特別展「中国 美の十字路口」（共催展）

これまで日本で行われた中国展は、漢や唐といった王朝の名宝展が中心であったが、本展は、唐へむかってトップスピードで突き進む時代のダイナミックな中国美術を集めた初めての展覧会として開催。この時期、北からは遊牧民族が進出し、西からはシルクロードを通過して、中央アジアの諸民族が中国大陸との往来を繰り返していた。中国大陸の南北に次々に興った王朝が、それぞれの正当性を主張すべく、より高次の文化を取り入れることに躍起になり、そのような中で文化が著しく成熟していった様相を展観。

- 1) 開会期間 平成 18 年 1 月 1 日～4 月 2 日
- 2) 会場 3 階 特別展示室
- 3) 主催 九州国立博物館、西日本新聞社、
TNC テレビ西日本、中華文物交流協会
企画協力 大広
- 4) 陳列品総件数 211 件（うち中国国家一級文物 133 件）

■資料 2. 海外研究者の招聘等

○東京国立博物館

平成 18 年度（2006）

職名	氏名	用務	期間
杭州市文物管理所所長	杜 正賢	当館蔵の中国青磁作品調査および最新発掘成果の情報提供	2006. 10. 21～10. 28

平成 17 年度（2005）

上海博物館、アメリカ・ロサンゼルス・カウンティ美術館、ロシア・クレムリン博物館より研究員及び展覧会事業担当者を招聘し、収蔵品調査や、展覧会事業についての意見交換。また、韓国国立釜山博物館、中国河南省文物管理局、パリ・チュルヌスキー美術館よ

り東洋工芸、博物館管理、日本工芸の専門家を招聘、館蔵品の調査のほか、博物館事業運営や将来の共同事業についての意見交換。

職名	氏名	用務	期間
国家文物局鑑定委員会 研究員、上海博物館研究 員	許 勇翔	館蔵品の調査、博物館収蔵品管理や将来 の学術交流についての意見交換	2005. 11. 24～12. 2 (9日間)
河南省文物管理局博物 館処長	康 国義	館蔵品の調査、博物館事業運営や将来の 共同事業についての意見交換	2006. 2. 27～3. 6 (8 日間)

平成 16 年度 (2004)

職名	氏名	用務	期間
上海博物館副館長	陳 克倫	日本・中華人民共和国両国間の学術情報 の交換及び研究の推進のため	2004. 3. 12～3. 21
上海博物館文化交流辨 公室	周 燕郡	日本・中華人民共和国両国間の学術情報 の交換及び研究の推進のため	2004. 2. 3～2. 8
上海博物館文化交流辨 公室	李 仲謀	日本・中華人民共和国両国間の学術情報 の交換及び研究の推進のため	2004. 3. 1～ 2005. 2. 28

平成 15 年度 (2003)

職名	氏名	用務	期間
上海博物館副館長	汪 慶正	日本・中華人民共和国両国間の学術情報 の交換及び研究の推進	2004. 3. 12～3. 21

○京都国立博物館

平成 18 年度 (2006)

特別展覧会「京焼—みやこの意匠と技—」関連で 5 人の研究者を海外から招聘するとともに、京都国立博物館からも研究員が作品調査のため海外へ渡航。文化庁、法人本部、京博による招聘事業により中国専門家の招聘しての、東アジアにおける紙文化財修復について今後計画されている事業の基盤づくり。

- 1) 海外研究者招聘、9 名 (うち国際シンポジウムでの招聘 2 名)
- 2) 研究員の海外派遣、延べ 14 名
- 3) 国際会議 (9 月 7 日～11 日国際学術検討会 中国 南教師範大学) への参加 1 名

所属機関・職名	氏名	用務	期間
文化部国家文物局博物 館司長	宋 新潮	東アジア紙文化財の保存と修復の技術交流	2007. 3. 12～3. 17
文化部国家文物局博物 館司科技情報処長	羅 静	東アジア紙文化財の保存と修復の技術 交流	2007. 3. 12～3. 17

ユネスコ北京事務所文化遺産保護専門員	杜 曉帆	東アジア紙文化財の保存と修復の技術交流	2007. 3. 12～3. 17
--------------------	------	---------------------	-------------------

成 17 年度 (2005)

職名	氏名	用務	期間
中国文物研究所研究員	陳 秀	日本に特有の文化財にかかる保存修復技術の調査のため	2004. 9. 1～ 2005. 8. 31
中国・浙江工商大学日本文化研究所 所長	王 勇	国際シンポジウム基調講演及びパネリスト、特別展示会出品の調査	2005. 11. 8～11. 15
中国国家図書館・善本特蔵部・副研究員	李 際寧	京都国立博物館所蔵の宋版の仏典調査	2006. 1. 25～1. 30

平成 16 年度 (2004)

職名	氏名	用務	期間
上海師範大学教授	方 廣■	当館所蔵の敦煌写本に関する調査研究及び国際シンポジウム「21 世紀の敦煌学写本研究の展望」における研究発表	2004. 11. 10～11. 16

○奈良国立博物館

平成 18 年度 (2006)

国際交流協定を締結している博物館を中心とした、海外の博物館との交流による、研究員招聘 10 名、研究員派遣 16 名。

国際交流協定を結んでいる 4 機関（中国・上海博物館、中国国家博物館、中国・河南博物院、韓国国立慶州博物館）との研究員の招聘及び派遣による、文化財の調査研究。上海博物館から研究員 3 名を招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館の視察及び意見交換。奈良国立博物館から 3 名を派遣し、上海博物館及び中国国内の仏教遺跡の調査研究を実施。また、派遣機関での所蔵文化財調査実施は、仏教美術に関する調査及び将来の作品貸借へとつながる調査。中国国家博物館へ 1 名を 1 カ月間派遣し、中国国家博物館及び中国国内の博物館等を視察し調査研究を実施。

正倉院学術シンポジウム開催にあたり、中国・陝西歴史博物館から 1 名、韓国・弘益大学から 1 名招聘、正倉院宝物が形成された 8 世紀における両国の文化財に関する研究成果を得る。

所属機関・職名	氏名	用務	期間
上海博物館物業管理部門主任	張 財生	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2006. 8. 28～9. 6
上海博物館開放部副主任	李 華	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2006. 8. 28～9. 6

上海博物館辦公室副主任	陳 勇	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2006. 8. 28～9. 6
陝西歴史博物館研究員	晏 新志	奈良国立博物館主催の「正倉院学術シンポジウム」出席	2006. 10. 27～10. 30
法門寺博物館 前館長	韓 金科	外国人芸術家・文化財専門家招聘事業（文化庁）による招聘	2007. 3. 8～3. 17

平成 17 年度（2005）

・調査研究

中国・上海博物館から研究員 3 名を招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館を視察し意見交換。奈良国立博物館からは 3 名を派遣し、上海博物館及び中国国内の仏教遺跡の調査を実施。特に特別展「大勸進 重源」に関連する遺跡の調査を実施。中国国家博物館から研究員 2 名を招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館を視察し意見交換。奈良国立博物館からは 2 名を約 1 カ月間派遣し、中国彫刻及び壁画等の仏教美術について調査を実施。

・海外の博物館との学術交流協定

昨年度締結した中国国家博物館、中国・上海博物館及び韓国・国立慶州博物館（継続）との学術交流協定に加え新たに、中国・河南博物館と学術交流協定を締結。

・研究員等の派遣実績

韓国・国立慶州博物館、韓国・国立中央博物館、中国・上海博物館、中国国家博物館、中国・河南博物院等に展覧会調査・学術交流のために研究員 13 人（延べ人数）を派遣。

職名	氏名	用務	期間
上海博物館情報センター主任	胡 江	博物館運営について意見交換	2005. 5. 25～6. 3
上海博物館管理委員会主任	胡 建中	博物館運営について意見交換	2005. 5. 25～6. 3
河南博物院館員	閻 新法	奈良国立博物館開催の特別展「古密教」の開始に伴う出陳作品に随行	2005. 7. 17～7. 29
河南博物院副所長工程師	魏 銀昌	日本に特有の文化財にかかる保存修復技術の調査のため	2005. 7. 17～7. 29
上海博物館副研究員	季 峰	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2005. 8. 26～9. 4
上海博物館副研究員	李 孔三	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2005. 8. 26～9. 4
上海博物館助会計師	馮 煒	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2005. 8. 26～9. 4
河南博物院主任副研究員	楊 愛玲	奈良国立博物館開催の特別展「古密教」の開始に伴う出陳作品に随行	2005. 8. 26～9. 8
河南博物院副主任館員	沈 鋒	奈良国立博物館開催の特別展「古密教」の開始に伴う出陳作品に随行	2005. 8. 26～9. 8
河南博物院館員	刘 小磊	文化庁「アジア諸国博物館・美術館研究協力事業」	2005. 11. 4～11. 14

中国国家博物館発展企画處處長	張 建華	中国国家博物館と奈良国立博物館との 学術交流	2006. 3. 10～4. 10
中国国家博物館社会教育部副主任	孫 麗梅	中国国家博物館と奈良国立博物館との 学術交流	2006. 3. 10～4. 10
河南博物院院長	張 文軍	文化庁「外国人芸術家・文化財専門家招聘事業」	2006. 3. 26～3. 31

平成 16 年度 (2004)

- ・ 中国上海博物館から研究員 3 人を招聘し、奈良国立博物館及び国内の博物館美術館を視察し意見交換。
奈良国立博物館からは 3 人を派遣し、上海博物館及び中国国内の仏教遺跡の調査研究を実施。
- ・ 韓国国立中央博物館、中国国家博物館、米国フリーア美術館から各 1 人の研究員を招聘し、当館収蔵品の調査及び国内の博物館・美術館における調査を行い、意見交換。
研究員等の派遣実績 6 人 (延べ人数)
- ・ 韓国国立慶州博物館、韓国国立中央博物館、中国上海博物館、中国国家博物館、中国河南博物院、米国ニューヨーク市立図書館、ドイツ・ベルリン東洋美術館、ライス・エンゲルスホルン博物館 (ドイツ・ベルリン)、マンハイム博物館 (ドイツ) 等に展覧会調査・学術交流のために研究員を派遣。
- ・ 中国上海博物館及び中国国家博物館との間で、新たに学術交流協定を継続締結。

職名	氏名	用務	期間
河南博物館副研究員	蘇 岩	奈良国立博物館開催の特別展「法隆寺」の出品作品に随行	2004. 4. 14～4. 26
河南博物館副研究員	馬 合菊	奈良国立博物館開催の特別展「法隆寺」の出品作品に随行	2004. 4. 14～4. 26
河南博物館副研究員	湯 淑君	奈良国立博物館開催の特別展「法隆寺」の終了に伴う出陳文化財の随判及び仏教美術の調査	2004. 6. 12～6. 23
河南博物院館員	靳 風枝	奈良国立博物館開催の特別展「法隆寺」の終了に伴う出陳文化財の随判及び仏教美術の調査	2004. 2. 12～6. 23
上海博物館人力資源部主任	朱 誠	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2004. 9. 15～9. 24
上海博物館人力資源部主任	朱 世平	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2004. 9. 15～9. 24
上海博物館人力処主任	顧 嘉群	上海博物館と奈良国立博物館との学術交流	2004. 9. 15～9. 24
中国国家博物館展覧部主任学芸委員	王 永紅	文化庁「アジア諸国博物館・美術館研究協力事業」	2004. 12. 13～12. 23

平成 15 年度 (2003)

韓国国立慶州博物館、中国上海博物館、中国国家博物館（北京）等との学術交流。

- ・中国上海博物館から研究員 3 人を 10 日間招聘。奈良国立博物館及び国内の博物館美術館等を視察し、意見交換。奈良国立博物館からは 3 人を派遣し、上海博物館及び中国国内の博物館（河南博物院、国家博物館等）・遺跡等を視察。
- ・中国国家博物館の研究員と、「日本の名宝」展に関わる種々の情報交換を実施。

職名	氏名	用務	期間
上海博物館芸術品公司経理	李 平	上海博物館と奈良国立博物館の学術交流のため	2003. 12. 1～12. 10
上海博物館陳列設計部	張 莉娟	上海博物館と奈良国立博物館の学術交流のため	2003. 12. 1～12. 10
上海博物館陳列設計部	袁 啓明	上海博物館と奈良国立博物館の学術交流のため	2003. 12. 1～12. 10

○九州国立博物館

平成 18 年度 (2006)

国際シンポジウムとして、アジアとの文化交流を文化財の保存修復を通して進める事業として、保存修復に関わる「東アジア文化財保存サミット」（9月30日）、独立行政法人国立博物館・福岡県との主催で博物館教育に携わる研究者等（イギリス、韓国、シンガポール、台湾、タイ、日本）による講演、報告、討論「博物館教育の活性化へ向けて」（10月29日 ミュージアムホール 参加者 230名）、「寧波美術から海域交流を考える」（12月16日～17日）を開催。

海外研究者の招聘 17 名（うち文化庁招聘事業 5 名）のうち、国際シンポジウムや資料の調査研究等ともなう中国からの招聘は 11 名。また、学術文化交流協定締結に向けた事前協議のため、南京博物館より南京博物館院長が招聘され、その後協定を締結。これら海外研究者の招聘は、文化庁主催の「アジア諸国博物館・美術館研究協力事業」による中国文物研究所研究員の招聘、「住友財団海外文化財維持・修復事業」など、既存の制度や外部資金を活用しての招聘が見られる。一方、日本側からの調査や打ち合わせなど、海外への研究員派遣は 32 名。

国際シンポジウムや外国人研究者招聘を通して、学術文化交流協定の締結、学術交流の推進、専門的な意見交換による、調査研究の充実等を実現できたことがあげられている。今後の見直しまたは改善を要する点として、外国人研究者を招聘するにあたり、今後とも外部資金等も活用して、計画的に進めていくことがあげられている。

職名	氏名	用務	期間
南京博物院院長	■ 良	学術文化交流協定締結に係る事前協議	2006. 6. 20～6. 30

南京博物院 展示芸術研究所長	陳 江	学術文化交流協定締結に係る事前協議	2006. 6. 20～6. 30
南京博物院長 文物保護研究所副所長	張 金萍	住友財団海外文化財維持・修復事業（泗水王陵出土西漢文物の保存）による研究打合せ及び研究発表	2006. 6. 1～6. 20
南京博物院長 文物保護研究所研究員	周 健林	住友財団海外文化財維持・修復事業（泗水王陵出土西漢文物の保存）による研究打合せ及び研究発表	2006. 6. 5～6. 16
四川省文物考古研究所元所長	馬 家郁	国際シンポジウム「東アジア文化財保存サミット」	2006. 9. 22～10. 1
南京博物院長 文物保護研究所副所長	張 金萍	国際シンポジウム「東アジア文化財保存サミット」	2006. 9. 22～10. 1
中国文物研究所研究員	陳 青	平成 18 年度アジア諸国博物館・美術館研究協力事業（文化庁）による招聘	2006. 9. 22～10. 2
中国紫壇博物館技術人員	丁 亜軍	寄託品組立作業による招聘	2007. 1. 29～1. 31
中国紫壇博物館技術人員	薫 玉柱	寄託品組立作業による招聘	2007. 1. 29～1. 31
中国紫壇博物館館長	陳 麗華	寄託品贈呈式出席による招聘	2007. 1. 31～2. 1
中国紫壇博物館副館長	遲 重瑞	寄託品贈呈式出席による招聘	2007. 1. 31～2. 1

平成 17 年度（2005）

・調査研究

九州国立博物館のメインテーマであるアジア諸国との文化交流に関する研究の実施。また、機関設置した最初の年のため、科学研究費補助金の申請機関として国の指定を受けることや、客員研究員との共同研究を計画的に実施することが研究方針。

・研究交流の推進

海外研究員の招聘及び当館研究員の派遣

- ・海外研究者招聘 10 人（うち文化庁招聘事業 6 人）
- ・海外への研究者派遣 40 人
- ・外国人研究員・研修生の受け入れ 3 人（台湾、イラク）
- ・文化庁主催のアジア諸国博物館・美術館研究協力事業等により、南京博物院、中国文物研究所、内蒙古自治区文物考古研究所、バンコク国立博物館、韓国中寶保存研究所（設置準備中）、大英図書館の研究員を招聘。

・国際的な講演会・シンポジウム等の開催

- ・開館当初に実施したオープニングイベントの一環である「国際博物館シンポジウム」（平成 17 年 10 月 18 日）を開催。

特別展記念講演会

- ・ 美の国 日本「一シルクロードから正倉院まで一文明交流と日本文化の形成」
（平成 17 年 10 月 23 日）参加者数 300 人

- ・ 中国 美の十字路口「ソグドと中国の東西美術交流」（平成 18 年 2 月 4 日）
参加者数 250 人

国際的な研究活動

- ・ 中国南京博物院と「泗水王陵出土木質文物」の保存に関する合作研究を実施、今後の協定締結に向けて意向書を交わす。
- ・ 中国内蒙古自治区文物考古研究所との企画展示及び保存に関する合作研究について協議。

国名	職名	氏名	用務	期間
中国	南京博物院文物保■研究所副研究員	万 俐	平成 17 年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業（文化庁）による招へい	平成 17 年 11 月 27 日～12 月 7 日
中国	中国文物研究所研究員	杜 曉帆	平成 17 年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業（文化庁）による招へい	平成 18 年 2 月 6 日～2 月 16 日
中国	内蒙古文物考古研究所研究員	陳 永志	平成 17 年度在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業及びアジア諸国博物館・美術館研究協力事業（文化庁）による招へい	平成 18 年 2 月 6 日～2 月 16 日

3 韓国の博物館との交流連携事例

国立現代美術館

国立現代美術館では、展示、学芸研究、行政などの分野において様々な国際交流業務を展開している。展示及び行政部門においては関連業務と関連させながら、中・長期的な準備段階として行われる場合が多い。学芸研究部門では、主に展示を中心にしながら、作品収集とそれに関連した情報調査や海外研修を実施している。



近年、国際交流業務の重要性が高まっており、美術界における国際的な人材交流事業を体系的・中長期的に推進しているところである。平成17年（2005）よりアジア各国の文化的多様性とその類似点に対する認識を発展させるため、文化観光部によって始められたアジア文化連携事業である「韓国の近・現代美術関連学芸士韓国研修」プログラムを継続している。

平成19年（2007）には、国立カンボジア博物館のボン・ヌン（Von Noeun）氏、フィリピンのアヤラ美術館のデータス R. サンソン（Ditas R. Samson）氏、バングラデシュのシルカルー・アカデミーのサッカー・ジアウディン・アフマド（Sarker Ziauddin Ahmmed）氏が参加した。このプログラムの目的は、近隣のアジア諸国とアジア美術界のネットワーク構築のため、アジア各国のキュレーターを招待し、韓国の近・現代美術を紹介することである。また、韓国の現代美術の国際化を推進するため、アジア各国の芸術家とキュレーターたちが意見交換をすることにより、西欧一辺倒の美術文化交流を脱皮することを目指している。第三世界の現代美術に対する相互理解と国際的な文化交流の機会を促進するという観点から、このプログラムは高く評価されている。

一方、アジア美術に関連する国際的なセミナーや学術行事に積極的に参加することにより、アジア諸国との人材ネットワーク構築にも力を注いでいる。「第2回アジア次世代美術館キュレーター会議」が国立現代美術館で開催され、5カ国（韓国、中国、日本、フィリピン、シンガポール）から若いキュレーターたちが集合した。また、平成19年（2007）にはシンガポールで開催された「第2回アジア美術館長会議」にアジアの14カ国が参加するなどの相互交流を強化している。現在は、学術行事及び展示などの面での成果を具体化する努力をしている。

1 国立現代美術館の職員に対する海外研修

- フランス、アメリカなどに6か月から30か月の研究
- 2 2007年アジアの近・現代美術キュレーター・プログラム
 - ① 韓国語の教育：ソウル大学の韓国語教育センター
 - ② 韓国現代美術の調査
 - ③ フィリピンの現代美術講演会
 - ④ 国内文化施設の訪問
 - 3 アジア美術館長会議（Asian Art Museum Directors Forum：AAMDF）
 - (1) 行事名：第2回 アジア美術館長会議 2007
 - (2) 期間：2007年11月16日-18日
 - (3) 場所：シンガポール美術館
 - (4) 参加機関：韓、中、日のほか、アジア諸国から14カ国（29機関）参加
 - (5) 主要成果：
 - ① 2009年の第4回フォーラム開催地に決定
 - ② アジア主要美術館との人的交流ネットワーク強化及び国際交流事業領域の拡大
 - 4 ICOM 2007年「国際博物館会議（ICOM）博物館の倫理規定」韓国語訳の発刊事業
 - (1) 期間：2007年1月～6月（6か月間）
 - (2) 場所：国立民俗博物館
 - (3) 参加機関：国立民俗博物館、国立中央博物館、国立現代美術館、文化財庁、
ICOM 韓国委員会、文化観光部（現文化体育観光部）、ユネスコ韓国委員会
 - 5 国立現代美術館「国際交換入居プログラム」事業
 - (1) 目的：美術創作スタジオで活動している韓国在住芸術家たちの海外進出基盤準備と新たな創作意欲を高める。
 - (2) 期間：2005年～
 - (3) 内容：ヨーロッパ及びアジア等のレジデンス・プログラムとスタジオ交換入居を支援している。また、平成17年（2005）から施行された「アジア作家の招待プログラム(Asian Artists Fellowship Program)」は、アジアにおける韓国文化を持続・成長させる文化政策の一環として実施されている。イラン、バングラデシュ、トルコ、モンゴル、ネパールなどアジア 5カ国の有望芸術家10名を招待し、韓国の文化体験及び芸術交流など多様なプログラムを通じた創作活動を支援している。

国立中央博物館

- 1 2006年アジア文化パートナーシップ事業-アジア博物館ネットワーク構築
この事業は、アジア各国の博物館関係者を相互に招待・研修してアジア博物館の間に緊密なネットワークを構築し、アジア各国に韓国の歴史と文化を紹介して韓国に対

する関心を高めることを目的としている。文化観光部が主催するアジア文化パートナーシップ事業の一環として、アジア各国の国立博物館のキュレーターを招待し、韓国の歴史と文化を紹介している。一方、韓国に滞在期間中、文化財研究及び展示交流活動ができる基盤も整えることができた。

2006年度には二番目の事業として、3月から12月まで、モンゴル、ベトナム、インドネシア、カンボジアから5名の研究員を受入れた。その研修内容は、韓国語研修、遺跡の調査、各地域文化施設の訪問、各種文化行事への参加、文化講座開催などが含まれていた。

(1) 期間：2006年 3月～12月(9カ間)

(2) 場所：国立中央博物館、ソウル大学校韓国語学院、地方博物館、各地域の文化施設など

(3) 参加国：4カ国 5名 (ベトナム 2、モンゴル 1、カンボジア 1、インドネシア 1)

(4) 目的

- ① アジア国立博物館ネットワークを構築して文化先進国としての地位の向上
- ② 国際交流を通じた国立中央博物館の対外競争力の向上
- ③ アジア各国との文化交流のための現地窓口の確保

2 海外の招待研修者研究発表

(1) 期間

① 1回目 2006年 5月 29日 (月) 15:00～18:00

② 2回目 2006年 11月 28日 (火) 13:00～18:00

(2) 目的：アジア各国の文化・歴史の紹介及び研修者たちの研究活動の報告の場を提供する。

(3) 内容：

① 1回目

- ・ ユロルーエルドン (モンゴル科学アカデミー考古学研究所) / モンゴル Golmod 地域の墓地発掘報告
- ・ ディグーノクーチェン (ベトナム国立歴史博物館) / ベトナム国立歴史博物館概要
- ・ チックーホアングーヒエブ (ベトナム考古学研究所) / 新石器・青銅器時代とベトナム ManBac 発掘報告

② 2回目

- ・ ユロルーエルドン (モンゴル科学アカデミー考古学研究所) / モンゴルのクンヌと韓国の楽浪文化の墓場の比較研究
- ・ ディグーノクーチェン (ベトナム国立歴史博物館) / ベトナム・ハロング文化のハロング・マーク研究
- ・ チックーホアングーヒエブ (ベトナム考古学研究所) / ベトナム考古学遺

跡と韓半島先史時代の土製作法及び農耕方式に関する比較研究

3 中国国家博物館の研究員による講演

(1) 日時：2006年 12月 8日

(2) 目的：中国における最新展示情報及び研究動向の把握

(3) 内容：

- ① 中国国家博物館組織の現況及び展示事例の紹介
- ② チベット仏教研究の現況

4 東北亜の先史文化研究学者による学術セミナー

(1) 日時：2006年 6月 22日(木) 16:00 ～ 20:00

(2) 目的：東アジア先史文化研究事業の一環で日本考古学の最近研究動向把握

(3) 内容：

- ① 日本における須恵器の出現年代
- ② 韓国で出土した日本の遺物の出現年代と流入背景

5 韓国－モンゴル共同学術調査3次協約締結

(1) 締結日：2006年 8月 13日

3次協約期間は 2007年 ～ 2011年

(2) 目的：韓国－モンゴルの共同学術調査事業の実施

(3) 内容：

- ① 韓国・モンゴル両国の遺跡・遺物に対する調査研究の実施
- ② 共同の調査に必要な情報と資料の相互交換

6 韓国－ベトナム学術交流協定

(1) 締結日：2006年 11月 24日

協定期間は 5年

(2) 目的：韓国・ベトナム共同学術交流事業の実施

(3) 内容：

- ① 所蔵文化財及び資料に関する相互貸借、展示会の開催と実施
- ② 専門職員の交流
- ③ 遺跡発掘の調査及び共同研究の推進
- ④ 学術情報及び資料、博物館活動に関する情報と資料の交換
- ⑤ シンポジウム、研究会などの開催と実施

7 アジア国立博物館協議会（ANMA）事業の関連実務委員会の設置

国立中央博物館の移転開館とアジア館の新設により、アジア地域文化ネットワーク構築を通じてアジア文化を共有する必要性が高まっている。この委員会は、アジ

ア諸国の文化交流が地域で偏重が生じないようにするため、アジアにおける博物館の中心的な役目を担っている。アジア国立博物館の相互協力を促進するため、アジア国立博物館協議会（ANMA）が設置された。

- (1) 期間：2006年 11月 22～25日（3泊 4日）
- (2) 場所：国立中央博物館、昌徳宮後援(秘苑) 文化探訪
- (3) 参加国：韓国、中国、日本などの10カ国の国立博物館国際交流実務責任者各1名
- (4) 成果：
 - ① アジア国立博物館協議会（ANMA）の運営方針及び定款の作成
 - ② 2007年 ANMA 第1次会議の開催方法の協議
 - ③ ANMA 創設及び運営方針についての共同合意

8 第1回 韓・中・日の国立博物館館長会議の開催

アジア代表博物館としての役目を遂行するため、韓・中・日3国の国立博物館の館長が協議を行った。この会議において、3国の館長がアジア地域の国立博物館との協力強化と国際的な地位向上のためのビジョンを提示し、他のアジア博物館を後援する役目を遂行するための体制を整えた。

- (1) 期間：2006年 9月15日（1日）
- (2) 場所：国立中央博物館
- (3) 参加国：韓国、中国、日本 3カ国の国立博物館館長及び実務者
- (4) 成果：
 - ① アジア国立博物館協議会の発足及び準備委員会開催の提案
 - ② アジア国立博物館における長期的な協力方針の協議
 - ③ 韓・中・日3国の国立博物館との協力方針の協議
 - ・ 展示、情報、人材、技術(保存科学) 交流に対する協力の強化
 - ・ 韓・中・日の3国が一緒に進行する共同プロジェクト構想及び運営方針
 - ・ 3国間の学術情報の交流促進
 - ④ 韓・中・日3国による交互開催（毎年）の合意

地方博物館

慶州国立博物館

慶州国立博物館では、文化体育観光部による「アジア文化財研究ネットワーク構築事業」の一環として、慶州博物館に慶州市から派遣された研究員に対する委託研修を実施した。平成18年（2006）8月1日から9月8日までの6週間、博物館研修、仏教遺跡調査及び韓国の伝統文化体験を実施した。研修参加者は、タンザウ氏（Tan Zaw、ミャンマー文化部考古学局の研究員）、ウツウォング・ツボル氏（Uachoonwong Choopol、タイ・メパロング大学講師）、タナサクシリ・ダリカ氏（Thanasaksiri Darika、タイ・カンチャナピセック国立博物館キュレーター）など3名であった。

平成19年（2007）9月3日～9月7日、「韓・中交流の年」に関連する文化財の共同調査、交流展示会の開催などを協議した。この学術交流友好促進のため、中国島西域社博物館の成建正館長らを招待した。また、日本とは、奈良国立博物館と研究員の相互交換プログラムを実施した。一方、東南アジア文化に対する理解を深めるため、「東南アジアの歴史と文化」というテーマで一般の市民を対象にした講演会も開催した。

光州国立博物館

中国の浙江省博物館と、文化交流協約を締結した。

- (1) 協約日： 2006年9月21日
- (2) 協約期間： 締結日から5年
- (3) 協約機関： 中国浙江省博物館
- (4) 協約内容： ① 韓中文化交流推進の一環としての展示会の開催
② 研究者の学術的な交流

全州国立博物館

1 姉妹館交流

- (1) 姉妹館交流15周年記念展「韓国文化への誘い- 全羅北道の歴史と文化」の開催

- ① 展示期間：2006年10月14日～11月26日
- ② 展示内容：

韓国と日本の友好推進の基礎を作り、石川県立歴史博物館との文化交流を推進するため、東北アジアの新しい文化として、韓国の全州博物館の所蔵品を石川県民に紹介した。

- (2) 姉妹館の学芸士招待研修

両館は姉妹館の締結で15年の間、毎年研究員に対する交換研修を実施している。また、小規模な展示会、国際学術セミナーも開催している。

- ① 研修期間： 2006年9月1日～9月30日

- ② 目的： 研修者を通じて日本の保存処理現状を知る機会を持つとともに、両館の友好関係を深めるため、石川県立歴史博物館学芸員(日本民俗学分野の保存処理)を招待して研修を実施した。研修期間の間、同博物館の保存処理に関する発表より、保存処理技術力の情報を得ることができた。

扶餘国立博物館

1 中国洛陽博物館との文化交流・協約事業

- (1) 期間： 2006年8月25日～9月8日
- (2) 目的： ① 人的・物的な交流を通して協力関係を深める。
② 国外にある韓国史に関連する資料の調査と学術研究を行う。
- (3) 内容： 相互の専門研究を通して交流の促進、展示技法の研修、百済に関連した研究資料調査の実施。

2 九州国立博物館との文化交流協約の締結

- (1) 期間： 2006年5月22日
- (2) 目的： 文化財の共同調査・研究、展示会開催など、学術的な交流と博物館運営に関する情報交換をする。
- (3) 内容： 九州国立博物館の館長が訪問し、文化交流協定を締結した。

濟州国立博物館

海外の島の文化調査研究 — 沖縄調査

- (1) 期間： 2006年5月7日～5月21日 (3次調査)
2006年11月15日～11月24日 (4次調査)
- (2) 目的： 濟州島文化に関する「島文化博物館」特化事業の一環として、海外の島文化調査の必要性を認識し、「海外の島文化調査研究」を推進している。
- (3) 内容： ① 2004年、初めての対象地を沖縄地域とした。2004年～2005年(1・2次)の調査結果より、2005年には海洋文物交流特別展「韓国-日本沖縄の貝製品を通じた先史時代文化の再発見」を開催した。
- ② 2006年、3・4次の調査を実施した。2007年、過去に沖縄地域に存在した琉球王国の歴史と文化を紹介し、東アジアの中で耽羅との関係を証明する海洋文物交流特別展Ⅱ「耽羅と琉球王国」を開催するためであった。
- ③ 3次調査では、特別展の展示資料の選定及び常設室展示品の入れ替えのため資料調査の実施をした。その対象は福岡、鹿児島、沖縄地域関連15機関であり、14-16世紀の琉球王国時代の資料調査をした。
- ④ 4次調査は、特別展の追加調査及び貸与協議であった。日本の文化庁、

東京国立博物館、九州国立博物館、沖縄地域関連13機関と協議をした。

国立大邱博物館

- 1 中国遼寧省博物館との学術交流協定の締結をした。
 - (1) 期間： 2006年9月11日
 - (2) 内容： ① 展示会と共同研究などのための所蔵品及び資料の相互貸借
② 専門職員の交流
③ 博物館活動に関連する共同事業の開催
④ 学術情報と図書資料及び博物館活動に関する情報資料の交換
⑤ 学術シンポジウム及び研究会の共同開催
⑥ 文化財保護に関する情報、技術交流及び学術文化交流における協力
- 2 展示特性化事業のため、日本の素材・繊維・服飾博物館の事例調査をした。
 - (1) 期間： 2006年12月4日～12月9日
 - (2) 目的： ① 文化学園服飾博物館、神戸ファッション美術館など日本の素材・繊維・服飾分野の特化された博物館を見学し、大邱博物館の繊維博物館での特性化事業に必要な資料を収集する。
② 2008年から2010年まで実施される繊維・織物・服飾分野の展示特性化に関連する素材博物館の展示資料及び展示デザインなどに対する資料を収集する。
 - (3) 内容： ① 国立民族学博物館、神戸ファッション美術館、東京杉野学園衣裳博物館、東京文化学園服飾博物館、東京繊維博物館(東京農工大学工学部附設)、東京国立博物館、横浜シルク博物館を訪問し、展示技術に関する展示企画及び展示資料の調査を行う。
② 今後の特別展示会を含んだ交流協力方針を協議した。

(表 ^{ヒョウ} 淳花 ^{シンファ})

参考文献： 国立中央博物館 年報 (2006年)
国立現代美術館 美術館白書 (2007年)

4 博物館関連学会等を通しての交流連携事例

連携事業	期間・場所等	概要
国際交流シンポジウム「変貌する21世紀の博物館—新世紀における台湾と日本の博物館世界との交流に向けて—」	2004年11月19日～22日 国立歴史博物館（台北市） 主催：中華民国博物館学会	独立行政法人制度や博物館評価など6つのテーマについて、台湾と日本の博物館関係者が発表。共通の課題に対する制度の違いや取り組み方などについて議論。 出所：日本展示学会通信 50号
国際シンポジウム「東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える」	2004年8月6日・7日 兵庫県立美術館ミュージアムホール 主催：アート・ドキュメンテーション研究会 共催：兵庫県立美術館 後援：美術史学会、美学会、全国美術館会議、民族藝術学会、文化資源学会、アート・マネジメント学会、ミュージアム・マネジメント学会	日中韓の美術図書館と美術作品・文化財データベースの専門家が、各分野の状況について発表およびパネル・ディスカッションを実施。 出所： http://www.artm.pref.hyogo.jp/sym04_08.html
国際シンポジウム「アジア及び環太平洋地域における自然史標本収集・管理と自然史研究」	2005年12月2日 国立科学博物館分館 主催：国立科学博物館	国立科学博物館の「アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館との研究協力」事業の一環として開催。オーストラリア及びニュージーランドの自然史系博物館等の機関の代表者が、各地域における自然史コレクションや自然史研究の現状等について講演 出所： http://research.kahaku.go.jp/symposium/sympo/news051202.html
国際シンポジウム「パブリック・ドメイン」収蔵品資料の活用へ向けて—美術館・博物館収蔵の映像資料の「フェア・ユース」を考える	2009年1月24日・25日 慶應義塾大学三田キャンパス 主催：慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構 後援：アメリカ大使館、フランス大使館、韓国大使館・韓国文化院、カナダ大使館、日本ミュージアム・マネジメント学会、全日本博物館学会、日本展示学会、アート・ドキュメンテーション学会、財団法人日本博物館協会	博物館資料も含むパブリック・ドメイン資料。その「パブリック・ドメイン」や「フェア・ユース」の定義と、活用のためのガイドラインを世界で共有し、消費材としてのコンテンツの著作権論議とは異なる、教育・研究目的でデジタル化された資料をオンライン活用する環境を整えることを目的に開催。 韓国博物館協会のベ・キドン会長が現状報告とケース・スタディーを紹介 出所： http://note.dmc.keio.ac.jp/topics/archives/549
アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究	2001～2003年度 九州大学総合研究博物館・農学研究院・比較社会文化研究院・理学研究院	ネットワーク構築による情報交換と共同研究を行うための基盤整備、博物館学芸員・職員の再教育を目的に実施 出所： http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/PP2004/05-J.html

(中村 隆)